

特集
の
意
図

精神症候、神経症候の中には、古くは「悪魔憑き」とされたものも少なくなかったが、医学の進歩によってそれらが疾患であることが明らかにされていった。本特集では、そのような歴史的経緯も踏まえつつ、さまざまな研究の発展とともに解き明かされてきた精神神経症候の最新知見を解説する。

1. 認知症における妄想（長濱康弘） 被害妄想を訴える患者は注意／帰属／結論への飛躍バイアス、および、心の理論の障害により社会的情報の誤った解釈が生じるためそのような妄想を呈すると考えられる。神経解剖学的基盤としては社会脳の障害が示唆されている。

特集の構成

2. 音楽性幻聴（二村明德，他） 難聴が存在すると音楽性幻聴のリスクが上昇する。聴覚刺激の低下によって生じる視床-皮質間および顕著性ネットワーク内での聴覚情報を補足する働きが、幻聴の発症に関与していると考えられる。

3. 感覚間相互作用の障害 — パーキンソン病の新しい認知機能障害（本間元康） 嗅覚情報でカテゴリを識別する課題において、パーキンソン病（PD）患者は視覚情報の影響をほとんど受けなかった。このような感覚間相互作用の障害はPDの前兆指標となり得る重要な所見である。

4. 分離脳患者の時間知覚（四本裕子） 脳梁欠損症患者では、ターゲット刺激の反対側に妨害刺激が呈示される時、健常者よりも妨害刺激の影響を強く受ける。この結果は脳梁が抑制性の機能を持つことを示唆している。

5. 異食症（船山道隆） 異食症と意味記憶障害は密接に関連している。異食症は意味記憶障害を伴うため、意味記憶障害を呈した患者に対しては異食症まで発展する可能性を念頭に置く必要がある。食べやすい／飲み込みやすい日常物品を患者の行動範囲から省くことが対処方法の1つとなる。

6. 器質性脳疾患における妄想性誤認症候群の機序（川合圭成） 妄想性誤認症候群は左脳梁膨大後皮質と右腹側前頭葉皮質／前頭皮質の損傷による自伝的記憶や親密性評価の揺らぎに加え、顕著性ネットワークの機能不全が伴うことで生じると考えられる。

7. 筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群の脳科学研究（渡辺恭良） アセチルカルニチンやセロトニンが筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群のバイオマーカーとなり得る。そのほかには前頭前野の萎縮も関連しており、脳全体の活動性の低下が易疲労性の神経基盤と考えられる。

8. 作話とエピソード記憶における「時間」と「自己」（岩田沙恵子，月浦崇） 前脳基底部分は海馬と内側前頭前皮質を結び付ける役割を持つ。前脳基底部の損傷により、「時間」と「自己」を適切に関係付けることが困難になり、作話症状が生じると考えられる。

9. fMRI ニューロフィードバックの精神疾患への応用 (戸瀬景茉, 他) fMRI ニューロフィードバックにより, 課題遂行中に特定の脳部位の活動を高めることができる。この手法による統合失調症, うつ病, 注意欠如・多動症, 強迫症の症状改善が報告され, 精神疾患の新たな治療の選択肢となることが示唆された。

10. 鏡像動作 (市川博雄) 補足運動野は一次運動野に対し運動遂行指令のみならず運動抑制指令も伝えている。補足運動野の障害による抑制機能の低下が, 鏡像動作の発現機序の 1 例として挙げられる。そのほかには, 錐体交叉の欠如も原因として考えられる。

11. アスペルガー症候群の臨床と脳画像研究 (太田晴久, 他) “weak central coherence model”, 予測的符号化の困難さ, 社会脳関連領域間の機能的結合の変調などさまざまな自閉スペクトラム症に関する知見を詳説する。また, 筆者らが作成した高精度の判別器についても紹介する。

12. トウレット症候群 (濱本 優, 金生由紀子) トウレット症候群に関する脳画像研究によって「皮質-線条体-視床-皮質回路」の異常が想定された。この回路に基づいて「正中中心核-束傍核」や「淡蒼球内節」などを中心とした領域に対する脳深部刺激療法の有用性が示されてきており, 臨床応用が期待されている。

13. 心的外傷後ストレス障害の精神的・器質的要因をめぐる議論 (重村淳, 他) 心的外傷後ストレス障害 (PTSD) の発症には災害などの直接的な恐怖体験だけではなく, 道徳的・倫理的な問題も関与している。東日本大震災後の調査では, 差別や中傷, 苦情を受けた場合に PTSD の発症リスクが高まるという結果が示された。

14. ナルコレプシーの病因と治療薬の開発 (入鹿山一友部容子, 柳沢正史) 筆者らが創出した YNT-185 は, オレキシン 2 受容体に作用し, 睡眠リバウンドなどの副作用を引き起こさずに覚醒時間を延長し, カタプレキシー発作を抑制する。脳室内投与でも腹腔内投与でも効果を示し, ナルコレプシーの根本治療薬となり得ると期待される。

15. ADHD の生物学的基盤 (林 若穂, 岩波 明) ADHD の発生機序として実行機能障害と報酬系の両者が障害されている “dual pathway model” が注目されている。近年では, 環境要因が DNA などの表現型を変化させる得るというエピジェネティクスが注目されている。

16. 睡眠障害としての「金縛り」体験 — 反復性孤発性睡眠麻痺 (福田一彦) 「金縛り」は反復性孤発性睡眠麻痺とも呼ばれる。入眠直後に生じるレム睡眠を背景として, 筋が弛緩しており身体は動かせないにもかかわらず, 覚醒時と同様の意識状態で夢を見ることによって生じる。仰臥位での出現頻度が最も高い。